

憧れと戒め — エディントンの基礎理論と、数秘術に落ちないための作法 (導出と選択を取り違えない) — [論文101]

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan | 山岸勇輝ラボ

2026年8月

— From thinking to syncing. —

要旨

体系は「基礎定数や次元を、幾何と数え上げから読む」というプログラム (4π ・次元階段＝論文01/02/64/69) を歩んできた。この道には、一人の巨人が先祖であり、同時に戒めとして立っている——アーサー・エディントン。彼は1919年の日食で一般相対論を実証し、恒星構造論を築いた本物の巨匠でありながら、晩年の『基礎理論』で、微細構造定数や宇宙の陽子数を純粋な数と群論から導こうとし、数秘術 (numerology) に滑落した—— $1/\alpha$ を最初 136 と「導き」、測定が 137 に近いと分かると $136 \rightarrow 137$ と後から一つ足した逸話は、物理が誤る仕方の教科書例になった。本稿は、彼を見下すためではなく、体系が同じ轍を踏まないための鏡として、彼の滑落を解剖する。壊れたのは四点：①後知恵の調整（データに合わせて式を動かす）、②固定した標的（答えを先に決めて理由を後づけ）、③独立導出の欠如（一致以外の根拠がない）、④反証可能な新予言の不在（既知の値の再現だけ）。これに対し体系の免疫は、この4年で鍛えた規律そのものだ：三層の札（思弁は第3層・非科学へ隔離）、別根の峻別（値が一致するだけの量を統合しない・論文58/86）、「共鳴は署名であって証明ではない」（論文100）、「値でなく関数として比べる」（論文58）、規約と事実を分ける（論文95）。本稿は攻めの総括（論文100の地図）と対になる、守りの総括である。射程：科学史・方法論の構造的解釈（第2層）で、新しい数学も予言も生まない。宇宙OSは第3層・非科学のレンズ。

本稿の位置づけ（規律）：本稿は科学史・科学哲学（エディントンの基礎理論、数秘術と正当な導出の境界）の構造的解釈である。新しい数学も新しい予言も含まない。要点は、体系の 4π ・次元プログラムの最大リスク (numerology) を、歴史の鏡で正面から解剖し、体系がそれを避けるための作法を明文化することである。エディントンを見下さない——彼の憧れの部分は本物で、戒めと同居する。「宇宙OS」は第3層の非科学レンズであり、機構の主張ではない。

1. 序：憧れと戒めが、同じ人物に同居する

体系は一貫して、「基礎定数や次元は、幾何と数え上げから読めるのではないか」という直観を追ってきた——基礎の $m = 4\pi$ (論文01/02)、次元の階段 (論文57/64)、なぜ3+1次元か (論文69)。この道の入口に、一人の巨人が立っている。アーサー・エディントン (1882–1944)。彼は体系にとって、最も近い先祖であり、同時に最も鋭い戒めである。

なぜ両方なのか。彼は本物の巨匠だった——1919年の日食観測で光の湾曲を測り、一般相対論を世界に実証した中心人物。恒星の内部構造の理論を築いた大天文学者。だが晩年、彼は基礎定数を純粋な数から導くという夢に取り憑かれ、数秘術に滑落した。本稿は、その滑落を——敬意を保ったまま——解剖し、体系が同じ轍を踏まないための作法を明文化する。新しい定理は作らない。これは論文100 (攻めの地図) と対になる、守りの総括である。

2. エディントンという巨人と、『基礎理論』の夢

史実 (エディントンの二つの顔)

光の側：エディントンは1919年、西アフリカ (プリンシペ島) の日食で恒星光の重力による湾曲を観測し、一般相対論を実証した。恒星の内部構造・放射平衡の理論 (*The Internal Constitution of the Stars*, 1926) を築き、天体物理学の父の一人となった。

影の側：晩年、彼は『基礎理論 (Fundamental Theory)』(没後1946年刊) で、微細構造定数の逆数 $1/\alpha$ 、陽子と電子の質量比、宇宙の陽子数 (エディントン数 $N \approx 1.57 \times 10^{79}$) など、群論的な数え上げと純粋な数から導こうとした。

その動機は、実のところ体系の動機とそっくりだ——「自然の数は、幾何と数え上げの必然として説明できるはずだ」。だからこそ危険なのだ。エディントンの夢は美しく、そしてその美しさが、彼を数秘術へ滑らせた。憧れと戒めは、同じ源から出ている。

3. 滑落の解剖：それは「導出」ではなく「選択」だった

エディントンの $1/\alpha$ をめぐる逸話が、滑落の核心を示す。彼は理論的に $1/\alpha = 136$ だと「導いた」。ところが実験値が137に近いと分かると、彼は理屈を継ぎ足して $136 \rightarrow 137$ に修正した (同時代人は彼を "Arthur Adding-one" と揶揄した)。現代の測定では $1/\alpha \approx 137.036$ で、整数ですらない。ここで壊れているのは、「導出」と「選択」の区別である。

観察 3.1 (数秘術の四つの失敗モード)

エディントンの基礎理論が「導出」でなく「選択」に堕ちた理由は、次の四点に分解できる。

- ① 後知恵の調整：答え（測定値）に合わせて、式や数え方を後から動かした（136→137）。
- ② 固定した標的：説明すべき値を先に決め、そこへ至る理由を後づけした（＝逆向きの推論）。
- ③ 独立導出の欠如：数値の一致以外に、その導出を支える独立な根拠（別の現象・別の原理）がなかった。
- ④ 反証可能な新予言の不在：既知の値を再現するだけで、まだ測られていない新しい量を賭ける予言がなかった。

四つに共通するのは、「値が合うこと」を「必然の証明」と取り違えたことだ。値の一致は、いくらでも後から作れる（自由なパラメータと十分な工夫があれば）。だから値の一致だけでは、偶然の韻と本物の構造を区別できない。エディントンは、この区別を越えて「必然だ」と宣言してしまった。

4. 体系の免疫：四つの防御

では、体系はなぜ同じ轍を踏まないのか。それは、この数年で鍛えてきた規律が、そのまま数秘術への免疫になっているからだ。四つの失敗モードに、四つの防御が対応する。

観察 4.1 (体系の四つの防御)

防御A：三層の札（①④に効く）。思弁（宇宙OS・光で建てる）は第3層・非科学として明示的に隔離し、検証可能な骨格（第1層）と混ぜない。予言なき思弁を「理論」と偽装しない。

防御B：別根の峻別（②③に効く・論文58/86）。値が一致するだけの量（ 4π 、2、 $1/4$ 、指数5...）を統合しない。出自（根）が同じだと証明できるまで、別物として扱う。

防御C：「共鳴は署名であって証明ではない」（②に効く・論文100）。面白い一致に出会ったら、それを結論でなく問いの入口として扱う。「見えてしまう」感覚は署名であって、証明ではない。

防御D：「値でなく関数として比べる」（③に効く・論文58）。二つの量が同根かは、一点の値の一致でなく、変数を動かしたときに関数として一致し続けるかで判定する（論文58が因子2の由来を決着させた手法）。後知恵の一点合わせを、原理的に無効化する。

さらに論文95（規約と事実を分ける）が土台を固める：**c**の数値は規約（SI定義定数）であって、そこに"深い必然"を読もうとすること自体が範疇間違いだ——エディントンが陥った罠の一種は、規約（人間の約束）を事実（自然の必然）と取り違えることだった。値の一致を追う前に、その値が規約か事実かを問う。これが体系の最初の関所である。

5. 体系への接続：攻めの地図（100）と、守りの総括（101）

本稿は、体系の 4π ・次元プログラム全体（論文01/02/64/69）に対する守りの総括である。論文100が「どの王道が、どの根で交差するか」を描く攻めの地図だったのに対し、本稿は「その地図を描くとき、どこで足を踏み外すか」を示す危険地図だ。二つは対になる。エディントンは、体系がぎりぎり踏みとどまっている崖の名前である。とりわけ論文94（マンデルブロの非整数次元1.26を体系の数と結びつけない＝語呂合わせ禁止）、論文85（五次の"5"を体系の数と結びつけない）、論文58/86（別根センサス）は、いずれもこの崖から離れて歩くための具体的な足さばきだった。エディントンの名を掲げることで、それらの規律がなぜ必要かが、一枚の顔をもつ。

著者の私感（第3層・非科学の札つき／機構の主張ではない）

正直に言えば、著者はエディントンの夢が好きだ。「自然の数は、幾何と数え上げの必然として読めるはずだ」——この直観は、体系の 4π にも、次元階段にも、宇宙OSの空想にも、脈打っている。だからこそ、エディントンは他人事ではない。彼の滑落は、著者自身がいつでも滑り落ちうる崖だ。「見えてしまう」感覚（論文100・68でも書いた"署名"）は、燃料としては最高だが、舵にはいけない。エディントンは燃料を舵と取り違えた。だから体系は、畏敬を燃料に、規律を舵にする——この一行は、エディントンという先祖への弔いであり、同時に自分への戒めである。彼を笑うことはできない。ただ、彼が渡れなかった橋の手前で、札を貼り、関数で比べ、別根を分けて、慎重に立っているだけだ。憧れの巨人に、静かな敬意と、そして小さな決意を記す。

6. 射程（何を示し、何を示さないか）

示すこと（記述的・方法論的）：

- ・ エディントンの二つの顔（GR実証・恒星構造／基礎理論での数秘術への滑落）（2節）。
- ・ 数秘術の四つの失敗モード（後知恵の調整・固定した標的・独立導出の欠如・反証可能な新予言の不在）＝「導出」と「選択」の取り違い（3節）。
- ・ 体系の四つの防御（三層・別根・署名≠証明・関数比較）と、規約/事実の分離（4節）。100と対になる守りの総括（5節）。

示さないこと（禁欲）：

- ・ エディントンを見下さない。彼の巨大な貢献は本物で、憧れと戒めは同居する。
- ・ 基礎定数を導いたと主張しない。本稿はむしろ「導いたと言っただけ」を明文化する論文である。

- 新しい数学・予言ではない。科学史・方法論の構造的解釈（第2層）。OSは第3層・非科学。

7. 結論

エディントンは、体系にとって鏡である。彼の夢——自然の数を幾何と数え上げの必然として読む——は、体系の夢とほとんど同じだ。だからこそ、彼の滑落は貴重な教訓になる。壊れたのは「導出」と「選択」の区別であり、その壊れ方は四つに分解できる：後知恵の調整、固定した標的、独立導出の欠如、反証可能な新予言の不在。

体系は、この四つに四つの防御で応じてきた——三層の札、別根の峻別、「共鳴は署名であって証明ではない」、「値でなく関数として比べる」。そして、規約と事実を分ける。本稿がしたのは、新しい主張ではなく、体系の 4π ・次元プログラムの崖の名前をエディントンと呼び、その崖から離れて歩くための作法を一枚にまとめたことである。畏敬を燃料に、規律を舵に——憧れの巨人が渡れなかった橋の手前で、体系は札を貼りつづける。守りの総括として、101番目の番地を、ここに返す。

参考文献

1. Eddington, A. S. (1926). *The Internal Constitution of the Stars*. Cambridge Univ. Press.
 2. Eddington, A. S. (1946). *Fundamental Theory*. Cambridge Univ. Press. (没後刊)
 3. Kilmister, C. W. (1994). *Eddington's Search for a Fundamental Theory*. Cambridge Univ. Press.
 4. Yamagishi, Y. (2026). *Distinct Roots / Census of Necessity* [論文58/86]. Zenodo. 10.5281/zenodo.21597747; 10.5281/zenodo.21744839
 5. Yamagishi, Y. (2026). *"Dimension" Is Not One Thing (Mandelbrot)* [論文94]. Zenodo: 10.5281/zenodo.21758581.
 6. Yamagishi, Y. (2026). *Convention and Fact (Poincaré)* [論文95]. Zenodo: 10.5281/zenodo.21758621.
 7. Yamagishi, Y. (2026). *The Crossing of Royal Roads (Census)* [論文100]. Zenodo: 10.5281/zenodo.21758864.
-

— *From thinking to syncing.* —

山岸 勇輝 (Yuuki YAMAGISHI)

© 2026 Yamagishi Complexity Torus Lab, Japan · Licensed under Creative Commons Attribution 4.0 International (CC BY 4.0)